



六朝言語思想史研究

著者	和久 希
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2013
報告番号	12102甲第6759号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00122253

氏名（本籍）	和久 希 （ 埼玉県 ）
学位の種類	博士（ 文学 ）
学位記番号	博 甲 第 6759 号
学位授与年月日	平成26年 3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	六朝言語思想史研究

主	査	筑波大学教 授	博士（文学）	井川 義次
副	査	筑波大学教 授	博士（文学）	小松 建男
副	査	筑波大学准教授	博士（文学）	稀代麻也子
副	査	筑波大学名誉教授	文学博士	堀池 信夫
副	査	青山学院大学名誉教授	博士（文学）	大上 正美

論文の要旨

本論文では以下の事柄が論じられている。辛亥革命以前の中国において、儒教がおよそ二千年にわたり国家思想（正統思想）の地位にあったことは広く知られている。その一方、秦漢および隋唐という二つの大帝国時代に挟まれた六朝（魏晉南北朝）時代は、長期にわたり国家的揺動が続いた動乱期であり、思想史について見れば、つとに清・皮錫瑞『経学歴史』が「経学中衰時代」（魏晉期）「経学分立時代」（南北朝期）と規定して以来、国家思想である儒教が衰退し、民間信仰としての道教や外来思想である仏教が台頭した、いわゆる「三教交渉」の時代であると目されてきた。また当時は、玄学や文学、歴史学など、さまざまな文化的営為が繁栄した諸文化の交錯する時期でもあった。ゆえに思想・文化をめぐる従来の研究は、いずれも六朝時代には前時代の儒教一尊の気風を脱したとみており、そのうえで各々固有の学問的立場と関心とにより、諸思想・諸文化の一側面を討究することが主流であった。かかる研究史にあつては、思想史研究における儒教の比重の相対的低下を招くという一面もまた、不可避なこととして進行した。ところが現実には、各王朝の交替は儒教儀礼としての禪譲によっておこなわれ、国家機構たる官僚制度も儒教のものが継続され、皇帝は天の祭祀を繰り返して自身の地位を視覚的に顕示していた。当時の国家の基幹を決定していたレジティマシー（正統性）は、やはり儒教にあったのである。では「経学」の衰退期にあつて、それでも知識層の根底をなす六朝時代の儒教思想の質的様相とはどのようなものだろうか。本論文は、六朝時代には儒教が退潮傾向に陥ったために他思想が前景化したのではなく、むしろ六朝時代の儒教が道仏、あるいは老荘や文学などの文化的諸価値を積極的に含み込みながら、それらの複合体として展開した、という思想史的仮説に立脚する。そもそも儒教は「天」を中心に据えるものであり、漢代には「天」の法則的秩序すなわち「天理」解明のための数理科学的営為がさまざまななされていた。その後、六朝時代になると「天理」に相即する「人文」とくに「人」における合理的秩序（文）としての「言語」への関心が興隆したが、それらは単に儒教経学（経典解釈学）内部にとどまるものではなかった。そこで本論文は、当時の言語思想を幅広く探究することにより、六朝時代の諸思想・諸文化の根底に潜在する儒教的エートスの文献実証的解明をおこなっている。

「序論」では、まずは六朝時代の思想史・文化史的事態を概述し、また当該領域をめぐる研究史に言及した。

そのうえで、上述した本論文の思想史の見通しを提示し、またその見通しに沿いながら再度、六朝時代の思想史的展開を略説し、本論各章に対する序説とする。

「第一章 大道の中——徐幹の経学」では、建安七子の一人、徐幹の著作『中論』を取り上げた。徐幹『中論』は伝統的儒家思想に立脚しつつも、漢末の混乱をもたらした「俗士」に対して、「君子」の明晰な判断こそが「大道の中」すなわち儒教の古典的正統性や規範・教化の淵源に到達し得るとみていた。そして徐幹はかかる儒教の理想を「六籍」とりわけ『周易』の「窮理」に依拠しながら形而上的境位に求めている。本論文では、儒教の古典的正統性や規範・教化の淵源である「大道の中」の語に着目し、彼の行論が魏晋玄学の嚆矢と呼ぶべきものであり、魏晋期の学問的方向性を決定づけるメルクマールであることを論じている。

「第二章 経国の大業——曹丕文章経国論考」では、三国魏文帝・曹丕による文章経国論について、彼が「一家の言を成す」と称揚した徐幹『中論』の議論を参照しつつ、その内実を探究した。またあわせて、曹丕による文章の制作が彼自身による「一家の言」を構想するものであったことについて論及した。曹丕による文章経国論は、近代的文学精神が古典古代に存在したことを示すものではない。しかしまた、特定の思想的著述（子書）のみに限定すべきものでもない。彼の文章経国論は、儒教経典を根底に、あらゆるすぐれた「文章」を含み込みながら世界像の全体を提示しようとするものであり、皇帝自身による『典論』『皇覧』制作の理論的根拠となるものであった。

「第三章 王弼形而上学再考」では、魏晋玄学の旗手である三国魏・王弼の形而上学的思索をめぐって、「道」と「無」を同一視する主流的見解に対し、近年のヨーロッパにおける解釈をふまえて再考した。そしてとくに概念的把握（称）という観点から「道」と「無」について検討した。「名」「称」といった概念的把握は、対象を分断し、限定的に把握するものである。そこで王弼は「称中の大」である「道」に対して「無称」というレベルを設定したが、その「無称」としての「無」は経験的世界を超絶し、その彼方に、あるものではないと設定される、そのようなものであった。

「第四章 言尽意・言不尽意論考」では、魏晋玄学における言尽意・言不尽意論争について、何晏（言不尽意）、欧陽建（言尽意）の議論を検討した。また従来、言不尽意の立場とみられてきた王弼について再考した。王弼は語ること（言語）と示すこと（卦象）という二重の方法により「尽意」を模索しており、そこに王弼は言語を超える知の可能性をみていた。しかしそれについては、そのことを語る自身の論理をも敢えて棄て去ることによって、それを保全することができる、そのようなものとなるほかはなかったものであった。

「第五章 阮籍の三玄論——言外の恍惚の前に」では、竹林七賢の一人、阮籍による老莊易三玄の解釈を検討した。阮籍は『老子』『莊子』『周易』の三玄すべてについて「論」を著すことで形而上的至高の理知的把握を試みたが、彼の思弁的構想は、実在的世界とその背後にある理念的基盤までにとどまるものであり、究極的至高の手前において途絶していた。本論文では、阮籍の論理的追求の途絶に着目し、かかる途絶こそが、言語を超絶した彼の内的経験の純粋性・絶対性を保全するものであったことを論じている。

「第六章 言語と沈黙を超えて——王坦之の廢莊論考」は、東晋・王坦之の「廢莊論」を考察の対象とする。彼は当時の放達的气運の思想的元凶を『莊子』に求め、儒教唱導の立場から「廢莊論」を著したのであるが、その内容は、批判の対象である『莊子』を含めた老莊易三玄に依拠するものであり、また王弼、郭象など、魏晋玄学の影響が濃厚であった。一方で彼は、当時の仏教的思惟の影響下にもあった。王坦之は『莊子』、魏晋玄学にくわえて『維摩經』の「入不二法門」にもとづきつつ、言語／沈黙の相対的対立を超える地平を開示しようとしていたのであった。

「第七章 形而上への突破——孫綽小考」では、東晋・孫綽が老莊的「道」を紐帯としつつ、儒仏道三教を融和的に統合していたことを論じた。ただし孫綽は、そのことを単に理知的に把握するのみならず、実際に形而上的境位への突破を志向していた。孫綽「遊天台山賦」に示された形而上への飛翔は、彼が魏晋玄学や仏教

的思惟を踏襲しながらも、さらにはあらゆる相対的対立の彼方へと飛翔しようとする企図を有していることを伝えるものであった。

「第八章 逍遙の彼方へ——支遁形而上学考」では、東晋の沙門・支遁の玄言詩、『莊子』逍遙遊解釈と般若思想解釈とを取り上げ、彼が般若思想を媒介として魏晋玄学の形而上学的思惟にさらなる展開をもたらしたことを論じた。支遁による形而上学的思索は、老莊に依拠しつつ、万物の基底の実在のさらなる深奥（重玄）を目指すものであったが、彼はそれを単に中国古典思想の伝統にとどまらず、外来思想である仏教的理念とも接合するものであるとみていた。そして彼はかかる形而上学的境位の体認を企図していたが、その境位とは、論理的思弁の極北において、終局的にはみずからの思弁的追跡の全体を忘却することで目指されるものであり、さらにはその忘却さえもが二重に設定される、絶対的凍結、究極的深奥なるものであった。

「第九章 辞人の位置——沈約『宋書』謝靈運伝論考」では、『宋書』謝靈運伝論における「辞人」の評価に着目し、沈約があらゆる「文章」を儒教の古典的正統性の内部に位置づけようとしていたことを論じた。そしてそのための理論的根拠として、彼が音律の数理的整合性を律曆思想（数理科学）に裏付けられてきた儒教的正統性に重ねていたことにも論及した。沈約は声調の構成に自覚的であり、四声を論じたことで知られているが、彼は音律的根拠をもって「辞人」を「詩人」とともに儒教的正統性の内部へと繰り入れようとし、それにより伝統的儒教の整合性・合理性に基礎づけられた「文」の世界を新たに開拓しようとしたのであった。

「第十章 経典の枝條——『文心雕龍』の立文思想」は、劉勰『文心雕龍』を考察の対象とする。劉勰は当時の装飾主義に陥った「文章」を古典的正統性に回帰させようと企図していた。彼によれば「文章」は本来みな「経典の枝條」として経典注釈に準ずる機能を担うものであり、国家秩序の確立のための資源であった。また劉勰は、経典が文彩をとまなうのと同様、あらゆる文章にも正統的文彩が必要であるとして「立文の道」を提示したが、それは五行説にもとづきつつ、視覚（形文）、聴覚（声文）、感性面（情文）における整合的秩序を志向するものであった。

「第十一章 隠——『文心雕龍』の言語思想」では、劉勰『文心雕龍』における「隠」という概念について、従来指摘されてきたような単なる修辞上の余韻、含蓄というものではなく、劉勰が『周易』の「互体」という卦爻操作に依拠しながら、言外の境位を言語以外の知的構造において把捉する可能性をみていたことを論じている。

審 査 の 要 旨

本論文におけるテーマ「儒教を中心とする六朝思想史」の独創性は「中国文学」領域資料を含む中国の「文」に関わる諸問題をめぐって古典的資料に基づいた柔軟な着想による清新な研究を展開したことにある。その際「三教交渉」的思想史観に代わり、儒教を基層としてその上に諸思想・諸文化を疎通させた、新たな六朝思想史の再構築を試み、研究の遂行に際して粘り強く緻密な文献実証を行っている。その内容としては当時の知識人が兼通していた諸思想・諸文化を横断的に探究し、その深底に当代の主流たる儒教的エートスを見出そうとしている。近代以降に分立した哲学・歴史学・文学等個別分野の研究の進展により、個々の対象に関する研究は大いに進展し、詳細精緻なものとなったが、その影で六朝の知識人全体を通貫する中心的理念は、各々固有の学問的立場と関心により分断され、見定めにくくなった一面がある。

和久氏は従来の研究史の達成と限界とを十分に自覚しながら、その中心的理念を当時の知識人の世界観に即しつつ「人文」としての「言語」に求め、その確定の上に複雑に交錯する六朝思想史・文化史の実態を立体的に構築しようとする。また本研究は、既存の「三教交渉」的思想史観に代わり、儒教を基盤としてその上に諸

思想・諸文化を疎通させた、新たな六朝思想史の構築を目標とするが、このことは着想においても、また対象範囲においても、従来の思想史研究に対してきわめて高い独創性を有しており、中国思想史をめぐる研究史に新たな地平を開拓するものである。

ただし、儒家的世界観が後世にまで続いてきたことを闡明しようという本論文の構想は、クリヤされなければならない問題点がある。果たして知識人の全てが、こうした世界観を常に意識し、そうした整合的世界観のみを自らの作品を通じて吐露してきたと言えるのか。近代的な意味での自己表出や、美的世界観の構築という事実が無かったといえるのか。また儒家との相違を意識的に強調する、道家や仏教の反儒家的主張にも、潜在的であれ反照規定であれ、儒家的世界観の影響を云々できるのか、などなどその意味で本論文には一層の文献上の検討と解明されるべき課題も残されているといわざるをえない。

しかしながら本論文のテーマは学融合的かつ独創的な学問的地平を開拓するとの構想の下、中国文学等の諸領域とも密接に関連するものであり、そのインパクトはきわめて広範にわたり、かつ甚大なものがある。また申請者の研究には、将来的に複数の学問領域の研究交流のさらなる活性化を促進する効果も期待される。よって、本論文の著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認めるものである。

2 最終試験

平成 26 年 2 月 6 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。